

白蛇の死

海野十三

青空文庫

浅草寺せんそうじの十二時の鐘の音を聞いたのはもう半時はんとき前の事、春の夜は闇たけて甘くなやま悩しく
 睡すつていた。ただ一つ濃い闇を四角に仕切つてポカッと起きているのは、厚い煉瓦れんが塀べいを
 くりぬいた変電所の窓で、内部なかには瓦斯ガスの群像のような油あぶら入り入変圧器いりりが、ウウウ
 ーンと単調な音を立てていた。真白な大理石の配電盤はいでんぱんがパイロット・ランプの赤や青の光
 を浮べて冷たく一列に並んでいた片隅には、一台の卓子ていぶるがポツンと置かれて、その上に
 細い数字を書きこんだ送電そうでん日記表にっきちょうの大きな紙と、鉛筆が一本無雑作むぞうさに投げ出されてい
 たが、然しかし当直しやうぢ技手の姿は何処どこにも見えなかつた。

今、全く人ひと気けの無いこの大きい酒倉さかぐらのような変電所の中では、ただ機械だけが悪魔の
 心臓のように生きていたのであつた。

スパーツ！

リンリンリンリン。

突然とつぜん白しろけ切きつた夜の静せい寂じやくを破やぶつて、けたたましい音響おんきやうが迸ほとばしる。毒々どくどくしい青せい緑りよく
 色よくの稲妻いなずまが天井裏てんじょううらにまで飛びあがつた。——電路遮断器サーキット・ブレーカーが働いて切断した
 のだつた。

と、思い掛けぬ窓のかげから素早く一人の男が飛び出して、配電盤の前へ駆けつけた。彼は慣れ切っている正確な手付きで、抵抗器の把手ハンドルをクルクルと廻すと、ガチャリと大きな音を立てて再び電路遮断器サーキット・ブレイカーを入れた。パイロット・ランプが青から赤に変色して、ぱたりとベルが鳴止むなりや。その儘まま技手は配電盤の前に突っ立って、がっしりした体を真直ぐつすに、見えぬ何物かを追っているようであった。もう四十年輩の技術には熟練しきった様な男である。——一分、二分。春の夜は闇けて、甘く悩しく睡っていた。

「土岐さん！ 土岐さん、一寸……」

不意に裏口へつづく狭い扉ドアが少し開いて、その間から若い男の顔がヒョクリと現われた。ひどく蒼白い顔をして、明らかに何事か狼狽ろうばいしながら四辺あたりを憚はばかっていた。

「おう」くるりと振返った技手は、

「国ちゃんか、なんだい？」と、何気なく配電盤を離れた。

「あの、一寸来てくれませんか、何うも可笑おかしいんです。お由よしが仆たれちやって」

青年は一途いちぢずに救いを求めるような、混乱した表情を見せながら、乾ひからびた言葉をぐつと呑みこんだ。

「お由——」

「ええ、仆れちやったきり、どうしても起きないんです。困ってしまつてね」

土岐健助は濃い眉を寄せてチラリと窓の方を眺めた。

「弱つたな、相棒は起せないし——」

「ええ？」

「喜多公なんだよ。考えものだからね」

さつと青年の眼は怯えあがつた。

「ま、この儘にして置いて一寸行つて見よう。何処だい？」

技手は思い返した様に、気軽に青年の肩を押しながら裏口へ出た。乏しい軒灯がぼつんぼつんと闇に包まれている狭い露路を、忍ぶように押黙つて二十歩ばかり行くと、

「土岐さん、此処！」と、青年は立止つて道を指した。

顔を地につけるようにして見ると、仰向きになつた、銀杏のようなお由の円い顔が直ぐ目についた。頸から、はだけた胸のあたりまで、日頃自慢にしていた「白蛇」のような肌が、夜眼にもくつきりと浮いている。のけぞっているの、鬚は頭の下に圧しつぶされ、赤い手絡が耳朶のうしろからはみ出していた。

「お由、お由！」

青年は憚るように声を殺して呼びながら、強く女を揺ぶったが、ぐったりと身動きもしなかった。彼は前にも幾度かそうして見たのであったが、もう一度機械的に黒縷子の襟を引き開け、奇蹟にでも縋るようになぐつと胸へ手を差し入れた。直ぐにむっちりと弾力のある乳房が手に触れたが、その胸にはもう、彼を散々悩ましたあの灼けつくような熱は無く、わずかに冷めて行くほの温味しか感じられなかった。心臓は？（ほら、こんなにね）と、よく彼の手を持って行つては、その強い躍動を示して笑った心臓も、パタリと止つてしまつている。

「ああ、心臓が止つている——」

「なに、心臓が！」

ぼんやり中腰になつてお由の白い顔を眺めていた土岐健助は、初めて愕然と声をあげた。そして、おずおずとお由の硬張つた腕を持ったが、勿論脈は切れていた。

「国ちゃん、一寸胸を開けて」

青年が力一杯襟をはだけるのを待つて、土岐は心持ち顔を赤らめながら、お由の乳房の下へびたりと耳を押しつけて見た。少しの鼓動も無い。すぐに眼瞼をひらいて見たが、瞳孔はもう力なく開き切つていた。

「死んでいる。もう全く呼吸が無くなっているんだ」

「大変なことになったな——でも、どうして死んだんでしよう」

「どうしてって君、君は今までどうしていたんだい？」

そう聞かれると、さすがに青年は此の年輩の技手に対して、赤い顔をした。が、何れにしても今の場合土岐の力を借りるより外、この気の弱い青年には継るものが無かったの
で、前後も無く早口にこう話し出した。

——宵の灯が点くと間もなく、お由は何時もの通り裏梯子から、山名国太郎が間借りをして二階へ上つて来たのであった。

「今夜はね、根岸の里へ行つて来るって胡魔化して来たのよ。私だって、たまにはゆつくり泊つて見たいもの。——大丈夫よ。まさか親分だって、そんなに女房を疑つちや、お爺さんの癖に外聞が悪いもの。かまうもんか、知れたら知れた時の事さ」

妖婦気取りのお由は、国太郎にびつたり寄添いながら非常に嬉しそうであつた。そして散々この気の弱い青年をいじめぬいて、少しも側から離そうとはしなかつたが、つい先刻になつて不図気が變つてしまった。

「矢つ張り私、帰つた方が好いわ。あんた怒りやしないわね。又来るには泊らない方が出

「好いもの、ね」

「だってもう十二時過ぎだぜ」

「怖こわかあないわ。こう見えたつて白蛇のお由さんだもの。夜道なんか平気よ」

「じゃ、其処そこまで送つて行こう」

「無論だわよ」

お由はまだ国太郎に絡からみ纏まつりながら、裏梯子から表へ出た。が、塀を一つ曲つて此処まで来ると、

「あら、私紙入れを置いて来ちやった。ほら、先刻帯さつきを解いた時、一寸本箱の上へ置いたのよ。あんたが悪いんだから、いそいで取つて来てよ」

お由は国太郎の胸を肩で小突こづいて、二人の時だけに見せる淫蕩いんとうな笑いを顔一杯に浮べていた。その濃艶のうえんな表情が、まだはつきりと国太郎の眼に残っているのに――

すぐに紙入れを取つて引返して来た時には、もうお由は此処に仆れていたのであった。

「初めは冗談だと思つたんですよ。けれど、様子が可怪おかしいんでしょう。だから驚いちゃつて――」

「一体、君が此処へ帰つて来るまで、詰つまりお由さんが一人で此処に残っていた時間は、ど

の位だったの」

「三分とは経つちやいないんです」

「三分？　そして君が帰つて来た時、この露路に誰も人は見えなかつた？」

「ええ。はつきり覚えてはいないけれど、たしか誰も見えませんでした」

が、其時そのとき何故なにゆえか変電所の四角な窓が、爛々らんらんと輝いていた事を青年は不図思い浮べた。

「困つたね、何方どっちにしても。どうする君は？」

土岐の言葉に、急に自分の立場をはつきり思い起して、国太郎は忽ち竦すくむように頭かかえを抱かかえてしまった。

「僕は、僕は殺されますよ。きつと、なぶり殺しにあわされるんだ！」

それは何んなとも言えなかつた。

一いつたい体お由は、今戸町いまとまちに店を持つている相当手広い牛肉店加藤吉蔵かとうきちぞうの妾兼女房めかけんなのであつた。が、悪い事にはこの吉蔵が博徒ばくとの親分で、昔「瘦馬やせうまの吉きち」と名乗つて売り出してから、今では「今戸の親分」で通る広い顔になっている。しかもお由はその吉蔵親分の恋女房であつた。

今から五年ばかり前、お由がまだ二十歳はたちで或る工場に働いていた頃、何処の工場でもそうであるが、夕方になるとボイラーから排出される多量な温湯が庭の隅の風呂桶ふろおけへ引かれて、そこで職工達の一日の汗を流すことになっている。その鉄砲風呂の中から、お由の膚き理めのこまやかな、何時もねつとりと濡れている様な色艶の美しい肌が、工場中の評判になつてしまつた。

「お由さんの体は、まるで白蛇のようね」

その白蛇の様な肌を、何かの用で工場へ来合きあわせた吉蔵が一目見て、四十男の恋の激しさ、お由に附纏つきまとう多くの若い男を見事撃退して、間も無く妾とも女房とも附かぬものにしてしまつたのである。

こうしてお由は娘から忽ち姐御あねいへと変り、あられもない「白蛇のお由」と自分から名乗つて伝法でんぽうを見習うようになったが、若いに似ずよく親分の世話をして、執念深く窺うかがいやる男共は手痛い目にあわされるといふ評判もつぱが専らであつた。

然し魔は何処ひそに潜んでいるか計り知れぬ。それ程気の強いお由が、この正月頃から臆おくび病ような大学生山名国太郎にすっかり魂を打ち込んでしまつたのだから――。二人の甘い秘密ひそは、幸い今日まで親分にも知れず、数々の歓楽かんらくを忍ばせて来たが、ここにもやつぱり

悪魔は笑っていたのだ。若しお由の死から国太郎との秘密が知れたが最後、深い中年者の恋の遺恨で、どんな惨忍な復讐が加えられることであろう。

生きた心地も無いこの哀れな青年を前にして、技手は全く途方にくれたようであったが、一方空っぽにして来た変電所の事も気になるらしく、咄嗟に何うにか、後始末の手段を考えてくれた。

「ね君、今は何うしてお由さんが死んだのか、誰に殺されたのかなんて事は研究している場合じゃ無いよ。何より君自身の体を心配する必要があるんだ。いいかね、後三十分で僕の交代時間が来る。そうしたら兎に角二人でお由さんの屍体を遠くへ運んで行こう。詰まり君とお由さんとの仲を嗅ぎ出されない為にだよ。そして君は、朝の一番列車で当分何処かへ姿を隠してしまうのだ。それが一番安全だからね。——後三十分だ。君はこの屍体を守って、変電所の物置の後で待っていて呉れ給え。忘れても声を立てちゃ駄目だぜ。相捧は喜多公なんだからね」

それは国太郎にとつて非常に頼母しく思われた程実に冷静な分別であつた。ただ不安なのは技手の言う相棒の喜多公、即ち変電所の技手補田中喜多一で、これは吉蔵親分の一の乾分である上に、秘かにお由に想いを掛けているのだと、国太郎は何時かお由自身の口

から聞かされた事もあるので、運悪くこうした所を見附かろうものなら、親分に告げるまでも無く半殺しの目にあわされるのは言うまでも無かった。

然し、幸い薄氷^{はくひょう}を踏む思いの長い三十分は、どうやら無事に過ぎたらしい。やがて足音を忍ぶようにして土岐健助が物置のかけへ来てくれたのは、もう午前二時を少し廻つた頃であつた。

「じゃ、いいかい」

言葉少なに技手はこう言つて、無雑作にお由の頭を抱きあげた。国太郎は夢中で足の方を持つたが、どつしりと重い死人の体は思つたより遥かに扱い難く、物の十間^{けん}と歩かぬ中^{うち}にもう息切がして来た。そして揺りあげる度にしどけなく裾^{すそ}が乱れて、お由好みの緋縮^{ひぢりめ}緬^{めん}がだらりと地へ垂れ下る。その度に彼等は立止つて、そのむつちりと張切つた白い太^{ふと}股^{もも}のあたりを搔^かき合^あわせてやらねばならなかつた。

「これじゃ遣り切れ無い、両方から腕を担^{かつ}いで見ようよ」

然し何^どうして見たところで硬張つた死人を運ぶのは可成^{かな}りの重荷であつたが、他に工夫のしようもなかつたのでその儘歩き続けた。この露路をぬけてドンドン橋を渡ると瓦斯会社^{瓦斯会社}の横に出る。それを真直ぐに、左手は深い小川をへだてて墓地、右手は石炭置場になつ

ている暗い道を、何うにか大河畔おおかわほとまで忍んで行つた。そこを左に折れて河添いに一丁ほど歩くと又左に折れて、間もなく百坪ばかりの空地あきちへ出る。空地の中央には何んとかいう小さな淫祠ほころまつが祀つてあるが、その後の闇の中へお由の屍体を下して、二人は初めてほつとした。

幸い途中で誰にも見られなかつた事は、彼等にとつて何よりであつた。

「土岐さん、一寸土岐さん！」

大声で揺り起されて土岐健助が、宿直室の蒲団ふとんの中からスツポリと五分刈頭を出したのは、もう朝も大分日が高くなつた頃であつた。

「ヤア！」

土岐は其処に喜多公こと田中技手補が柔かいものをだらしなく着て、棒のように突つ立っているのを見出すと、渋い眼を無理に開けるようにして声を掛けた。然し喜多公の顔は緊張しきつて蒼白まつさおだつた。

「あの、今戸の姐御が殺されちゃつてね。つい其処にむごたらしく殺やられているんでさ。あつしはこれから直ぐ今戸へ行かなけりやならないんで、すみませんがあんた一つ、今日

の当番をかわつてくれませんか」

「へえッ！」

健助は瞬間どきりとしたが、その気持を隠さずに喜多公の顔を見詰めた。が、喜多公はそんな事に頓とんちやく着ちやくなく、技手が当番の事を承諾すると、風のように外へ飛び出して行った。(むごたらしく殺られている) 土岐は起きようともせず、昨夜ゆうべの生きている儘に死んでいたお由の美しい屍体を思い描いて、喜多公の残して行った言葉を不思議に思った。

「そんな筈はないんだがな」あのお由のあらわな白い胸や太股をまざまざと描き出して、土岐はふつと顔を赤らめた。

宿直室の外は火事場の様な人通りであつた。

「まあ、いやだ。そりやいい女だつて言うけど、腕も脚も無いんですつてさ」

「あら、何うしましょう。私見るのが怖くなっちゃったわ」

その声に土岐はがばと跳ね起きた。そして手早く洋服を着てしまふと裏口から飛び出して、群衆と一緒になつて駈け出したのである。

平常ふだんはがらつとしてゐるあの空地が、今朝はもう身動きも出来ない程の人だかりだった。土岐はまざまざと昨夜の屍体と向き合う事を恐れながら、それでも人を掻き分ける様にし

てどんどん前へ出て行つた。そして人々の隙から一目お由の屍体を見るなり、余りの事に彼は危あやうく声を立てる処であつた。

思い掛けなくも両腕、両脚を無むじ慘さんにすぱりと切り取られたお由の屍体は、全く裸体にされて半分小川の中へ浸されているのだ。その白蛇の様な肌は朝日に蒼白く不気味な光を帯び、切口は無花果いちじくの実を割つた時の如く毒々しい紅黒色こうくろしよくを呈していた。

(こんな筈は無い) 土岐は余りの事に思わず顔を背けたが、不図、今頃は多分三十里も東京から離れてしまつたあの氣の弱い国太郎が、若しこれを見たら何んな事になつたらうと思つた。と同時に、彼は自分が昨夜犯した屍体遺棄罪いきざいから、完全に救われた様な氣軽さも覚えて、もう二度とお由の不気味な屍体を見る氣はなく、其の儘きまま踵かかとを返したのであつた。

だが、なんとという奇怪な事件だろう。お由は露路に三分間ほど一人で立っている間に、何者にか巧妙な手段で、一つの傷も残さず殺害されていた。その屍体は土岐と国太郎の手に依つて空地へ運ばれたが、翌朝になるとそれが一枚の布も纏わずに投出され、しかも何者にかその四肢を切断された上持去られている。考えように依つては、痴情ちじやうの怨みうらみか何にかでお由を殺した最初の犯人が、なお飽き足らずに屍体を運ぶ二人の後を付け、其処で再び残忍な行為を犯したとも思えるし、或いは空地に棄てられた後お由は偶然に蘇生そせいして、

通り合せた何者かに再びこの無惨な殺害をされたとも思えぬ事は無い。

兎に角、この白蛇のお由の不可解な謎の屍体は、忽ち土地の警察は言うまでも無く、警視庁強力犯係の大問題となつて、時を移さず血眼の大捜索が開始された。お由の屍体は直ぐに大病院に運ばれて解剖に附されたが、其処からは何等犯罪的な死因は得られず、或いは一種の頓死ではないかとさえ言われたが、屍体損壞の点から見ても、矢張り他殺説の方が一般に主張された。

そこで屍体は一時亭主の吉蔵に下げ渡され、今戸の家へ親戚一同が集つてしめやかな通夜をする事になつたが、其の席上で端なくも意外な喧嘩が始まつてしまった。というのは、恋女房の棺の横に坐つて始終腕組みをしていた吉蔵親分が、つと焼香に立つた喜多公を見て、悲痛な言葉を浴びせたに始まる。

「喜多公、よく覚えて置けよ。殺された女の恨みは七生祟るつていうからな」

「何んですねえ、親分。冗談じゃねえ」

「なに！ 女房が殺されたつてのに、冗談口を利く亭主が何処にある。てめえの為を思うから言つてやるんだ。後世の事を思つたら、今の内に——」

「親分！ 乙に絡んだものの言い方をしやすね」苦笑いをしていた喜多公は、そこまで言

われるとキツとなつて形を改めた。「冗談なら冗談でいいが、親分！ それを本気で言いなさるんなら黙つちやいませんぜ。べら棒め、姐御の屍骸しがいが何を喋しゃべっているか知つてゐるな、一人ばかりじゃねえ！」

「何んだと？ てめえはそれじゃ、おれの恩を仇あだで返けえす気だな。よし、そんなら言つて聞かせる事があらあ。一体、お由の屍骸を一番初めに見附けて来たなあ何処どいつの何奴だ。あの晩、てめえは何処で何をしていやあがつたんだ。お由の胸あいくちへヒ首あいくちを差し附けて……」

「親分、それじゃ姐御を殺したなあ、あつしだと言うのか！」

「胸に聞いたら判ることだ」

「何んだと！」

さつと茶呑み茶碗が飛んで壁に碎けた。途端とたんに血相けつそうを変えた二人が、両方から一緒に飛びかかつて、——が、其の場ばは仏ほとけの手前てまえもあるからと、居合いあせた者が仲へ入つてやつと引分ひきわけている内に、丁度ちやうど張込ちやうどんでいた刑事がどかどかと踏込んで来た。そして関係者一同はすぐに拘引こういんされてしまった。

しかし二時間ほどすると、エレキの喜多公だけを残して、他の一同は警察から帰されることになった。残された喜多公はお由の死んだ夜の行動について、何んと思つたか一言も

口を利か無かつたのだ。その時の吉蔵の供述きようじゆつはこうである。

「あつしは十時に店を閉めて、お由が留守だから久し振りで玉の井たまへ行って見る気になりました。今戸から橋場はしばをぬけて白鬚橋しらひげはしを渡つたんです。けれど何うも気がすすまないんで、一通りひやかしてしまつと、二時頃には家へ帰つて寝てしまいました。その翌朝よくちよう、何んの気なしに聞いていると、乾分の一人が昨夜喜多を玉の井で見かけたつて噂を小耳にはさんだんで、お由が殺されていると言しらう報せを聞いたのは、それから間も無くでございました」

では、何故喜多公はその夜の行動を明らかに説明しなかつたか？ 土岐技手が其の夜国太郎もたらに漏した言葉では、喜多公こと田中技手補たしかは確にその頃は変電所に勤務中ではなかつたのか？

然し二三日後、喜多公がやつと口を開いた時には、こんな意外な陳述ちんじゆつがされていた。「実は、あつしは姐御、詰りお由さんに想いを掛けていたのです。で、幾度も気を引いて見ましたが、なかなか思うようにはなりませんので、あの日、灯が点くと間も無くお由さんが泊り掛けで根岸へ行つたと聞きましたので、あつしは根岸の家の番地を人知れず確たしかめて、お由さんの後を追つて行きました。根岸へ着いたのは八時頃だつたと覚えていま

す。所が何うしても此処と思う家が見当りませんので、今度は一軒一軒裏口へまわつて、お由さんの声を目当に探し廻りましたが、矢つ張り知れませんが、その中に十一時半になつてしまいましたので、何んだか急に馬鹿馬鹿しくもなつて、其の足でぶらぶら歩いて引つ返し、千住せんじゆの万字楼まんじろうという家へ登あがつて花香はなかという女を買あがつて遊びました。登あがつたのは多分十二時半か一時頃でしょう。翌朝其処を出たのは六時半頃です」

「何故又そんな事を今まで隠していたんだ」

「ヘツへ、姐御の後を附けたなんてうっかり言つては、飛んだ嫌疑けんぎが掛かると思いましたんで——」

警察では直ぐに万字楼を調べて見たが、大体彼の言つた事に相違そつゐはなかつた。

お由の死亡時刻は解剖の結果、午前一時前後ということになつてゐる。して見れば時間の点からいって、喜多公は親分の方より嫌疑が薄くなる訳で、一先ひとまず彼も釈放されることになつた。

警察では他に誰も容疑者として拘引しておらず、この事件はわりに無雑作に放置されてゐる如く見えていたが、其の実搜索は八方に拡がっていて、少しでも怪しいと睨にらんだ者には必ず刑事が尾行していたのである。然しお由の死後七日までは、これぞと思う手懸てがかりは

何等得ることが出来ずにいた。

すると八日目になって、初めて新しい二つの報告が集つて来た。一つは、あの日以来吉蔵の店では冷蔵庫へ入れる氷を五貫目ずつ余計使つている事実、一つは、あの日を境にして失踪した者の一覽表の中から、山名国太郎という大学生がお由に似た年頃の婦人を自室に引き入れている所を一二度見た者があるという報告であつた。

お由事件の為に特設された搜索本部は、この二つの報告に色めき立って、主任は直ちに吉蔵の店へ警察を向ける一方、山名国太郎の行方を八方に搜索させた。

吉蔵は警官の臨検りんけんに大小三個の冷蔵庫を直ぐ開いて見せた上、氷の消費量増加については、

「何にしろもうこんな陽気ですから、氷だつて段々殖ふえる一方でさあ」と、軽く説明した。然し主任がその位の説明で満足する筈はなく、当分夜の間刑事を吉蔵の店の床下に張り込ませて、何処までも事件の端緒たんちよを掴つかむようにと手配した。

一方山名国太郎の失踪については、喜多公を変電所へ張つて行つた刑事から、偶然ぐうぜん手懸りがついた。というのは、変電所主任土岐健助宛の無名の手紙から足が付き、スタンプの消印で栃木県とちぎけん今市いまいち附近に国太郎が潜伏せんぷくしていると判つたのである。

いよいよ国太郎が逮捕されたとなると、事件は、何う展開するであろう。国太郎とお由の密会には証人がある事だし、あの夜土岐技手が現場へ呼ばれた時には、既にお由は死んでいたのだから、国太郎がこの他殺に全然無関係であるという事は説明出来まい。同時にお由の屍体遺棄が明らかになるので、土岐技手にも嫌疑の余地が出て来る。其の夜の勤務は土岐一人で他に証人が無いのだから、国太郎の言う通りお由が露路に一人でいたとすれば、其の間に健助がお由を襲うことも出来たのである。

こうして殺人犯人の嫌疑者は四人となった。

其の翌日の夕方、山名国太郎は今市から護送されて来た。青年は数日の懊悩にめつきり憔悴して、極度の神経衰弱症に陥っているらしく、簡単な訊問に対してもその答弁は案外手間がとれた。が、結局国太郎は前述の委細を全部白白させられたのである。そして直ちに問題となったのは土岐健助の行動であった。先ずその屍体遺棄の方法が咄嗟の手段として余りに計画的であった事。殊に、彼は国太郎に向つて、

「喜多公が相棒だから——」と言っているが、事実その夜、田中技手補は非番であつて、変電所の日記によつてもそれは明らかかな事であつた。では何故土岐がこんな虚言を弄したか？

その時取調べ室の電話が突然響き渡つたのである。搜索主任は直ぐに受話器を取つたが、突然サツと顔色を変えた。そして国太郎の訊問を一時中止すると、二三の部下は何事か囁いて、あたふたと一緒に自動車へ飛び乗つた。

夜は既に三更さんこうに近かつた。

自動車を棄てて主任が加藤牛肉店のくぐり戸を入ると、其処に張り込んでいた刑事が待つていて、直ちに奥の吉蔵の居間へ案内した。その部屋の一方の壁に仕掛けてあつたのである。壁は刑事の手に依つて扉ドアの如く左右に押し開けられ、忽ち間口まぐち一間奥行三尺ばかりの押入れが現われた。その押入れの中央に仏壇ぶつだんの様に設置してある大冷蔵庫。その扉ドアを開けて見せられた時、さすがの主任も「アツ」と顔を背けずにはいられなかつた。中には若い女の太股のあたりから下の立ち姿、——草葡萄くさぶどうのくすんだ藍地あいじに太い黒の格子こうしが入つたそれは非常に地味な着物であつたが、膝ひざ頭がしらのあたりから軽く自然に裾をさばいて、これは又眼も醒めるばかり真紅まっかの緋縮緬を文字通り蹴出けだしたあたりに、白い蠟ろうの様なふくら脛すねがチラリと覗のぞいている。何う見ても若い女の腰から下の立ち姿であつた。言うまでも無くこれはお由の両脚で、同時に其処から両腕も発見された。これ等は時を移さず警察へ押お収しゆうされたが、親分加藤吉蔵は既にお由殺しの有力な嫌疑者として、主任と入れ

違いに拘引されていたのであった。

やがて夜は明け放れた。世間は綻び初めた花の噂に浮き立っていたが、警察署内の取調べ室では、極度に緊張しきつた吉蔵の訊問が続行されていた。然し彼は何処までも犯人は自分で無いと主張するのである。

「あつしはあの晩、玉の井へ行つたつて事を申し上げましたが、実はお由と喜多公のことが氣になつて、寺島てらじまの喜多公の家へ様子を見に行つたんです。しかし、お由は愚か喜多公も家にはいないらしいんで、それでは他所よそで密会をしていやあがるんだと思ひ、白鬚橋を橋場の方へ戻つて来ました。其時ふとこいつあ千住の方にいるんじゃないかと思つたんで、変電所へ踏込む積りで、橋の袂たもとを右へ、隅田駅すみだへの抜道をとりました。多分二時を少し廻つた時刻でしたが、すると彼処あそこに御存知の様に、何んとか言う情事いろことの祠ほこらがあるんで、そいつを一寸おが押んで行く氣になつたんです。そして、序ついでに小便をしようと思つて、祠の裏手へ廻ると、其処でお由の死骸を見附けてしまつたんで、あつしはびっくりしてしまいました。——旦那の前ですが、あの女には一寸變つたところがありましてね、詰り痛い目に会わされると喜ぶ様な性質たちなんでさ。だから、よくあつしに、そんなにお前さん妾わたしのことが心配なら、いつそ腕を切るなり耳を落すなりして置きやいいじゃないか、どうせ妾はお

前さんの物なんだからって、よく言っていたんです。それが本気なんだから驚くじやありませんか。そいつをあつしはあの晩お由の屍体を見るなり思い出したんで、——こうして置けば厭いやでも灰にしてしまわなけりやならねえ、そうすればもう二度とこの綺麗な手足は自分の物で無くなってしまうんだと思うと、へッへ、まあそんな気持からあつしは大急ぎで家へ取って返し、腕と脚を貰ったという訳なんです。仕事は血が飛ばねえように、あの小川の中でやりました。——あつしのやったのは只これだけで、お由を殺した犯人につきちゃ、あつしだつて判りやとつくに殺しまいませあ……—

然し主任に取つては、吉蔵が屍体を損壊したのも一時いちじの脱れの口実を作る手段と思えぬことも無かつた。

この問題のお由の両腕と両脚は、大学の法医学教室に廻されて、熱心に犯行事実を研究されていた。その結果、吉蔵の申し立てた切断方法が肯定された以外に、不思議な傷口が別に四ヶ所発見されたのであつた。第一は左手の拇おやゆび指ひとさしゆびと人差指ひとさしゆびの尖端せんたん二ヶ所に、喰ごいいたような探い傷があること、同様な傷が又両足の裏にもあるのであつたが、極く小さい上に血のじみ出た形跡もないので、或いはお由の死後吉蔵がつけたものかも知れぬ、とも考えられていた。ところが、丁度其処へ遊びに来た電気工学のW助教授が一目これを

見るや、「君、これは高圧電気に感電した時受けた傷だよ」と助言した。

警察署では主任が吉蔵の調べに手を焼いて、一先ず訊問を打切り、屍体遺棄のかどにより、変電所の土岐健助に拘引状を発しようとしていた。その申請書しんせいしょを書き始めた時、パツと室内の電灯が消えた。そして、停電は珍しくも近来に無く一時間も続いたのである。

「どうしたと言うんだ、冗談じゃ無い」

主任がついに堪りかねて、変電所へ電話で問い合せて見ようと立ち上った瞬間、電灯はサツと明るく室内へ流れた。同時にジリジリと電話のベルが鳴ったのである。それは大学の法医学教室から、お由の死因が高圧電気の感電であつた事を知らせる電話であつた。

主任の横顔は極度に緊張して、受話器を掛けると一刻の猶予ゆうよもなく土岐技手拘引の手続きにかかったが、それを追いかけて再び電話が鳴る。それは部下が変電所から掛けた長い報告であつた。

要は、今しがたの停電は二人の男が変電所の一千ヴォルトの電極に触れて感電死したことによるもので、二人共全身黒焼けとなり一見いずれが誰と識別しきべつし難いが、一人は勤務中であつた技手土岐健助、一人は喜多公こと田中技手補である事に相違ない。この惨事さんじの

原因は目下調査中であるが、兩人の体からみ合っている所から推して、一方が感電したのを一方が救いに行つて仆れたとも見え、或は兩人の間に何か格闘があつて組合つたまま感電したとも思われる節がある、との事であつた。

「到頭やつたか。残念な事をしたな」

受話器を離れた主任は、誰にとも無く呟いて崩れるように椅子に腰を下した。

猶、その後の報告によると、応急修理に高い所へ登つた一技手は、奇怪な配線のあるのを発見した。それは故意か偶然か、変電所の壁を通つて向いの家の廂へ渡り、其の端が鋸力で作つた樋に触れていたのである。もしこの配線に高圧電気が供給されれば、言うまでもなく樋に触れた人間は即死しなければならない。そしてお由は丁度その樋の傍に仆れていたのであつた。

では、お由殺しの犯人は土岐健助か、それとも喜多公か？

二人の過去を洗つて見ると、土岐の方は変電所から開閉所へとコツコツ転任されて歩いた外、これと言つて変化の無い単調な過去しか持つていないに反して、喜多公の方はいろいろな電気工生活をやって来ている。その上、お由がまだ工場にいたころ、その試験係を勤めていた事実もあつて、当時仲間の一人が試験中に感電死した時、可溶片が早く切

れた為に只指先と足の裏に小さな傷を受けたまま美しく死んだ事件を見たこともあるそうである。

で、犯人が喜多公とすれば、親分とお由を張り合った結果、お由が思う様にならないので、あの夜自分が非番であるにも係わらず、忍んで行って、犯行の後、巧みに千往遊廊^{ゆうかく}へ現われたとも考えられた。

しかし又、白蛇のお由を知っている四十男はこう言うのである。

「ああいう形の女は、私達年配の男に好かれる者ですよ。吉蔵親分だってそうでしょう。土岐さんも丁度厄^{やくどし}年位だったじゃありませんか。いくら懇意^{こんい}にしても、つい目の前で楽しんでる所を見せられちゃ、一寸妙なはずら気も起りまさあね。それに腕のいい人でしたからね——」

いずれにしても二人が死んだ後、お由殺しの事件の搜索は即刻打切られてしまったので、これ等はただ苦勞性の人々の臆^{おくせつ}説にすぎないのである。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第1巻 遺言状放送」三一書房

1990（平成2）年10月15日第1版第1刷発行

初出：「新青年」博文館

1929（昭和4）年6月号

入力：tatsuki

校正：土屋隆

2004年11月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白蛇の死

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>